

後藤昭雄先生をおくりたてまつることば

上善は水のごとしといへども、水はひききにながれ、地をはひてかたちさだかならず。たけたかき水や、たとへば人をのみこむ津波洪水なんど、上にありながらおそろしき下悪の水といはんか。かへりて上善の水は下にありてみえず、人に気づかれずして恬たり。

丁亥のとし、先生、おほやけごとはなれてのちかくれたまふ奈良の山をおり、飄然吾妻にくだりてわが成城学園にきたらせたまふ。霞洞をいでてなほ逸気さりたまはざれば、関左の学人らよろこぶことかぎりなく、奉じて朝野群載の会読をおこしぬ。学事もとよりおこたることなく、金剛寺ふみくらのしらべもつづけたまふよし。先生、大学雑事にもこころよせられ、あるは入試作成における、意味と論理に急なる策問の、やまとぶみとして通ぜざるをばただされること度々なりし。あるは学ビノ森なる社会人教化における、としごろ事務方より叩頭請ふほどながきにわたり、いつしかわれら、その恩沢にあまんじて気にもとめずなりぬるも、まさに上善みえざるがごとし。かたはら映画を談じてときをわすれたまふは人もしるところなれど、封切館、陋巷なる名画座、貸しビデオ屋、図書館A V室にもたびたび示現、和洋新旧雅俗の作を涉獵したまふは、おもふに悉皆網羅をこのむ訓詁学者の性にあらずして、胎中世塵を落とす仙仏導引の一法なるべし。

かくことしげき大学にありながら、寸暇玉筆を呵しては巻冊山をなし、いままた颯々と仙境へかへりた

まはんずる、凡愚よりみれば神術か。ただし先生が奇踪や、天馬空飛ぶ天仙といはんより、ひくき俗にみつつ高雅をうむ地仙の質とおほえはべれば、ふたたび青山清隱のちも、燕居遵生につとめられんのみならず、ときに風に御して地にまひおり、われらを化俗したまはんことをばこひのみまつると云。

平成廿五癸巳三月下澣

後輩 宮崎修多